

たぐみ

T A K U M I

No.024

平成21年6月●夏号

信州名匠会

(題字：故 池田三四郎 前名誉会長)

粹を集めた国宝指定木造建築に感嘆

信州名匠会研修旅行「岩手・宮城県の建築を訪ねて」

信州名匠会の平成20年度の研修旅行は11月15・16日に、24名が参加して行われた。今回は世界遺産登録を目指す岩手県の平泉町と宮城県仙台市、日本三景松島を訪ねた。中尊寺金色堂や瑞鳳殿、瑞巖寺など国宝指定建築を見学。総移動距離1000km超の強行スケジュールであったが、古の匠が造りし建築に感銘を受ける2日間であった。



えさし藤原の郷にて

浄土の世界を具現化した日本独特の空間造形



えさし藤原の郷を散策する一行

平泉周辺には、日本史における重要な仏教寺院や庭園などが現存または遺跡として数多く残っており、文化遺産として世界的に高く評価されている。現在、平成23年の世界文化遺産の登録を目指して各種事業が推進されている。

中尊寺金色堂は、岩手県西磐井郡平泉町の中尊寺にある平安時代後期の仏堂で、奥州藤原氏の初代藤原清衡により天治元年（1124年）建立された。京都の平等院鳳凰堂とともに平安時代浄土教建築の代表例であり、当代の建築、美術、工芸の粹を集めたものとして国宝に指定されている。(文・(有)エヌ設計 西澤嘉雄)

研修旅行スナッツ



瑞鳳殿の前で記念撮影



中尊寺金色堂の内部



仙台メディアテーク前（伊藤豊雄氏設計 2001年グッドデザイン賞）

研修旅行日程

11月15日（土）

長野市－えさし藤原の郷－中尊寺－ホテル（泊）

11月16日（日）

ホテル－瑞鳳殿－せんだいメディアテーク－
瑞巖寺－フェリー乗船（日本三景松島めぐり。
松島～塩釜）－長野市

平成20年度研修旅行「岩手・宮城県の建築を訪ねて」参加者名簿（24名。氏名・所属、敬称略）

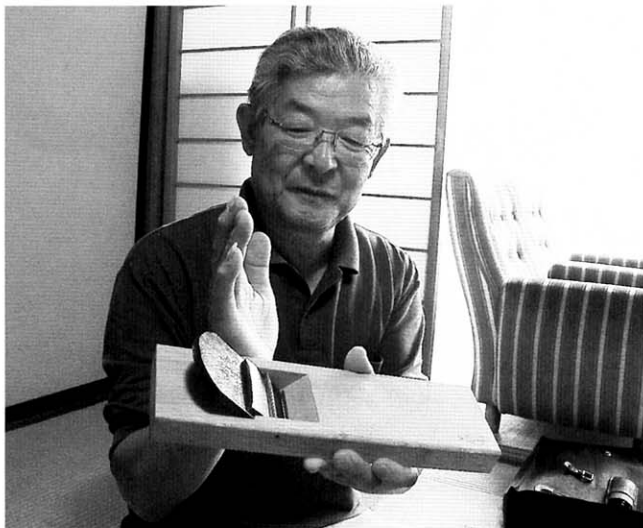
伊藤 章・(有)アキプランニング、内山 保・朝陽工芸(有)、鎌倉 良収・(株)鎌倉材木店、鈴木 隆・ルームデザインハウス、鳥羽 英夫・長野サウナ販売(株)、宮川 裕行・三ツ友建築企画、佐藤 満博・(株)二見屋、中島 重雄・中島建築、白石 大陸・サンコー特機(株)、犬飼 栄治・(株)シナノ大理石、坂田 守夫・坂田工業(株)、高木 茂実・松田・南信(株)、吉田 雅彦・(有)スタジオ・スペースツー、岸本 貴志・(株)本久、山口 真一郎・(株)サンワ、竹内 公夫・(株)ビホームテクノクリエート、西宮 武久・(株)綿内瓦工業、堀 誠・堀 幸一・建築工房アカシア、西澤 嘉雄・西澤 重門・西澤 哲也・(有)エヌ設計、新井 啓明・(株)ブルーライン、西沢 広智・事務局・(株)宮本忠長建築設計事務所

(財)税理士共栄文化財団の地域文化助成対象に決定

伝統の技と心を後世に

山中桐箱店 山中袈裟嗣氏

profile●昭和18(1943)年8月20日生まれ。16歳から父・五良^{ごろう}さんのもとで桐箱づくりを学ぶ。「印籠」「かぶせ」など各種の桐箱をはじめ、掛け軸を巻きつける「太巻き」や、茶道具、額縁なども手がける。箱は長さ3mと大きなものから、へその緒を入れるものまで幅広い。新嘗祭の献上箱としても使われる。



愛用の鉋の刃は薄く削るために6分5厘。普通の鉋より「寝ている」。

山中袈裟嗣さん(山中桐箱店)が(財)税理士共栄文化財団の地域文化助成金の対象に選ばれ、6月16日に松本市内で目録を贈呈された。伝統工芸技術の保存や後継者の育成に取り組む団体や個人を対象に助成されるものだ。

「表装し直したら、箱はいらないので引き取ってくれ」と、取引先の表具屋さんから聞いた話を紹介する山中さん。「建物が変わり、床の間のない家が増えた。掛け軸を飾ることも減って、床の間があっても、年中、同じものを掛けっぱなし。そういう時代です」。

暮らし方が変わり、桐箱のみならず桐自体を取り巻く文化や環境が変わった。価値観も変わり、記憶も失われつつある。今では「桐をひく製材屋さんもめっきり減った」と言う。

それでも桐箱づくりの依頼が絶えることはない。貴重な品が存在する限り、なくなることはない仕事ではある。そんな桐箱づくりに憧れて、山中さんの元を訪ねてくる若者もたま

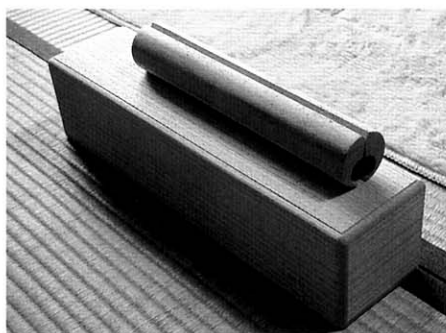
にいる。「一人前になるには最低10年かかる。今は表具屋さんも厳しい。毎日、仕事が追いつかないくらいにあれば別だけど、そんなわけにはいかない」。

業として成り立たせる難しさ。せっかくの弟子入りを断らざるを得ない苦い経験を振り返る。山中さんの技と心をどのように後世に伝えていくか。山中さんの抱える課題は、山中さん一人の課題ではない。

山中さんの手仕事を後世に伝えるために、今回の助成金の一部を活用して、デジタル映像に収録して保存する計画が進められている。



作業場下にある倉庫で桐の説明をする山中さん。

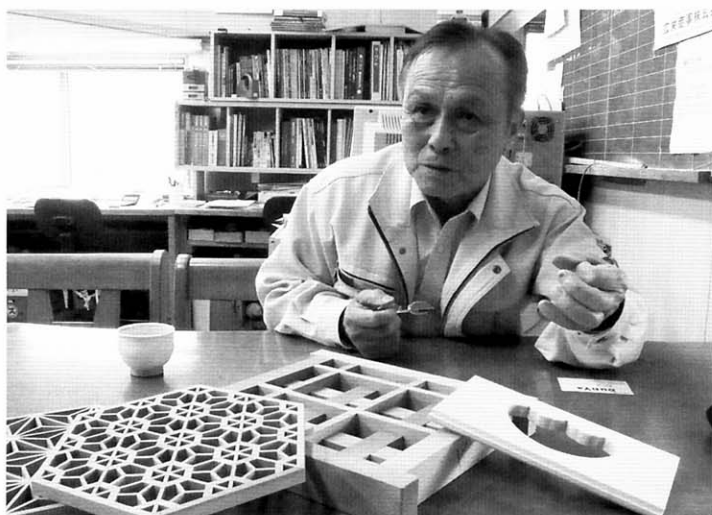


会員にきく
「たくみの仕事」Vol.17

親子二代、 製作技術の向上に挑む

有限会社中沢建具店（小布施町小布施） 代表取締役 中沢 英雄氏

profile●昭和16年（1941）生まれ、68歳。名古屋市出身。昭和36（1961）年、中沢建具店を創業。専務は長男・智さん（1級建具製作技能士・2級建築施工管理技士）、工事主任は次男の康敏さん（1級建具製作技能士・2級建築士・2級建築施工管理技士）。妻、長男夫人との家族経営。



「設計者の豊かな発想の設計図面を見せられると、挑戦心や闘争心が湧いてきます」。

び場でした」と智さん。中沢さんは「あと2人、若い人材が育ってほしい」と願うが、「単価が上がらないと、若い人は育てられない」と課題を語る。

しかし、「あの時は値切られたから妥協しました」という言い訳は通じない。建具は、家屋の風合いを決める、お化粧のような存在である。裏も表も、四面が見られる。ねじれや反りなどの狂いが出ないように、乾燥材を保管する資材倉庫で入念に材料を選び、製作方法にも細心の注意を払う。伝統的な建築物の、実物の建具を見に行き、参考にすることもある。

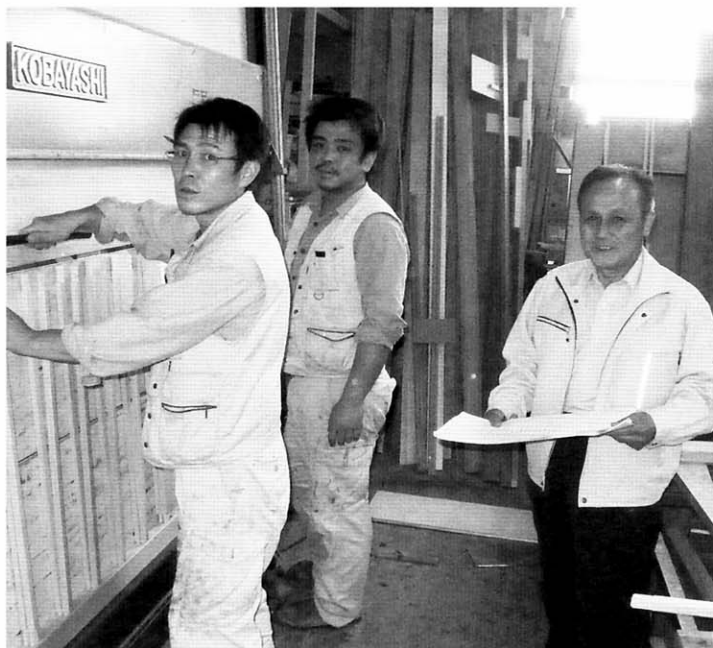
「設計者が求めておられる姿を図面から読み取って、どのように製品にしていくのかに、いつも苦心しております。打ち合わせの段階では、床暖房で反る可能性があることをお伝えしたり、暖房機を取り付ける位置を、経験を踏まえてご提案することあります」。

心がけているのはメンテナンスの即応力だ。建具は、作りは繊細な製品だが、しょっちゅう動かされ衝撃も加わる。不具合が出るといちばん不便を感じるのが建具。「電話をいただいたら、すぐに動くことが、長い目で見てもちばんの営業です。誠意を込めて、せっせと仕事をするのですね」。

「宮大工だった父は病弱でした。小学5年生のころには、部材に手で穴を彫る工程を手伝っていました。神棚を作るときは、水で身体を清めて、丹精を込め働く父の後姿を、毎日見ていました」。上京して親方に弟子入りし、住み込みで働いた。質の高い仕事を進める親方や兄弟子の働きぶりをお手本にしながら、基礎中の基礎を体得していった。

20代から小布施で仕事を始めた。「仕事をいただいたら、夢中になって取り組んで、納期に間に合うように仕上げる。その繰り返しと積み重ねでした。生きた技は、真剣勝負の本番でしか身につかないものです」。

2階の事務室で中沢さんが話す間も、工場からは二人の息子さんが操作する機械の音が聞こえてくる。長男の智さんと次男の康敏さんは、「手作業」の1級建具製作技能士だ。「私も弟も、小さいころからここが遊



「本物志向への回帰を感じます。ハウスメーカーの家に住んで数年後に、やっぱり無垢のかまち戸を、と本物を求める人も増えています」と智さん（左）。康敏さん（中央）はCADを使いこなす建築士でもある。

定例研修会●Report

(平成20年11月～平成21年4月)

平成20年度第5回研修会 「善光寺山門見学会」

平成20年11月29日(土) 善光寺山門にて
講 師：小林清英氏(株清蘭堂・信州名匠会員・上田市)
参加者：30名



山門内部で壁画の修復作業を進める

「障壁画修復の苦勞を語る」

信州名匠会は11月29日、善光寺山門の見学会を開き、山門内陣の障壁画修復を担った小林清英氏(株清蘭堂)が障壁画修復の歴史や苦勞などを語った。

善光寺山門内陣の障壁画の修復は今回で2度目。1750年の山門完成と同時期に描かれたとされる山門内陣の障壁画は、当時3面すべてがハスの花だったという。明治15年以降に行われたとされる1度目の修復で、正面の障壁画を色鮮やかな天女図に書き換えられたとされる。

小林氏は、「昔は障壁画の下張りの紙に商家などで使っていた台帳をつないで使用していた」と話し、今回の修復でも明治15年と記された台帳が出てきたという。このことから明治中期から大正の頃に修復が行われたことが推測される。

小林氏は修復に当たって、「ほこりや雨水が流れて絵の具の剥落が多く、劣化がひどかった」と振



山門近くで事前の説明を聞く

り返る。善光寺でも修復して飾るか、修復せずそのまま保存するかを迷った末に修復を選び、信頼ある小林氏に依頼した。「これ以上の劣化を防ぐため、紙に水分を加え、少しずつ汚れを取ることを何度も何度も繰り返した」と話す小林氏。根気と集中力を要する大変な作業だったという。

集まった会員らは、修復した部分がわざと分かるように修復するという文化財保護の考え方に驚きと納得の声を上げた。修復により息を吹き返した障壁画の前に、小林氏は「最低でも300年は持つ修復を行った」と話していた。

平成20年度 【新年会】

平成21年1月21日(水)
ホテルJALシティー長野「四川楼」にて
参加者：37名

「村越先生の贈り物に感激」

会員同士の親睦を図り、一年の抱負を語り合う信州名匠会新年会が、例年にならって開催された。当会顧問の村越久子先生(雪しろ窯主宰)からの干支の縁起物のプレゼントに一同感激。

厳しい社会情勢の年、匠の知恵で前向きに仕事に臨む元気をいただいた。



和やかに新年の抱負を語り合った新年会

平成20年度第6回研修会 【小布施町立 図書館現場見学会】

平成21年2月28日(土) 建設現場にて
講師：黒崎紀彦氏(有黒崎建設・信州名匠会会員・小布施町)、
杉下浩平氏(NASCA一級建築士事務所・東京都)
参加者：36名

「建設計画および鉄骨工事について」

2月の研修会は、小布施町に建設中(21年6月現在)の小布施町図書館の現場見学会を行った。設計は古谷誠章氏/NASCA、施工は北野建設(株)、(有)黒崎建設、(株)小布施建設のJV。

今回は信州名匠会会員の黒崎紀彦氏(有黒崎建設)の計らいにより、鉄骨建方の現場見学会が実現した。現場事務



三角形（開架閲覧室）と四角形（閉架書庫、セミナールーム、事務室ほか）を組み合わせた構造

所で監理者の杉下浩平氏から、計画説明が行われた。特に特殊な形態の大屋根の架構については、その形態

に至る経緯、施工の難易度等、興味深いテーマについて、設計者と施工者からの多角的な説明があった。

当初、鉄骨建て方が完了した状態での見学を予定していたが、架構が予想以上に複雑で難解なため工程が遅れ、大屋根の全貌を見ることはできなかつた。しかし、途中で枝分かれする鉄骨柱や非常に縦長のプレー



なだらかに弧を描く大屋根のかたちが天井部分にまで反映され、複雑な架構を成している

ス等、普段目にするのでできない特殊な工法を見ることができた。また、設計者の考える新しいアイデアを、様々な職種の人々の試行錯誤や努力が支えていることに、改めて気づかされた。

平成20年度第7回研修会 「佐藤さんの住まい 新築工事 現場見学会」

平成21年3月28日（金） 建設現場にて
講師：堀 誠氏（建築工房アカシヤ代表・信州名匠会理事）
堀 幸一氏（同工房、一級建築士）
参加者：17名

「木造住宅の木造作・建具の工夫」

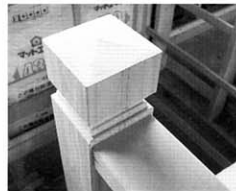
以前建て方見学をした「佐藤さんの住まい」の完成間近の状況を見学させていただいた。

今回の内容は木造住宅の木造作・建具の工夫についてである。一枚板の戸は手で鉋をかけ、木の収縮を活かした接着材を使わない工法であることなど、丁寧な職人の技術で出来上がっている。木材の塗装は仁丹や柿渋など5工程以上の塗り重ねによって作り上げられるもので、古材のよう



建具の説明をする三田氏

な落ち着いた雰囲気を感じさせるものであった。障子枠の二枚ほそなど、細部にまでこだわりのあるディテールが印象的であった。玄関には東出輝彦氏（信州



階段親柱のデザイン

名匠会会員・安曇野市）作のステンドグラスが飾られるそうだ。

「平成20年度理事会」

4月8日、宮本忠長建築設計事務所にて、平成20年度理事会を開いた。宮本本会長ほか理事8名、事務局4名（オブザーバー1名）が参加、会の現状を踏まえた今後の活動計画を語り合い、総会に向けた準備を確認した。

平成20年度第8回研修会 「雪しろ窯 陶芸教室」

平成21年4月25日（土）
講師：村越 久子氏（信州名匠会顧問）
参加者：18名

「雪しろ窯で土に向き合う」

4月25日に上田市武石の雪しろ窯で、名匠会顧問の村越久子氏（創造学園大学芸術学部教授）を講師に、恒例の「陶芸製作」を行った。会員やそのご家族ら18名が参加して、お昼をいただいた後、スタッフの方々のマンツーマンの指導を受けながら、みな、思い思いに土と向かい合った。6月24日に開かれる総会の会場に、みなさんの力作が展示される。



村越氏の指導をいただき、思い思いの作品を創作する参加者